

「ありがとう 言いたかった」

第2次世界大戦中に外交官の杉原千畝氏(1900〜86年)が発給した「命のビザ」によりナチス・ドイツの迫害から逃れ、神戸市に一時滞在したユダヤ人のマーセル・ウェイランドさん(95)が2月末、82年ぶりに同市を訪れた。「ずっとありがとうと言いたかった。心からありがとう」。ウェイランドさんは地元住民らに感謝の言葉を繰り返した。

95歳ユダヤ人男性

「命のビザ」で避難

82年ぶり神戸に



ユダヤ難民を支援した「神戸ユダヤ共同体」跡地に残る石垣に手を触れるマーセル・ウェイランドさん＝神戸市

した。ウェイランドさんは、このビザで命を救われた1人だ。

ウェイランドさんはポーランド出身。ドイツが同国に侵攻した1939年、家族と共にリトアニアに逃れた。一家はリトアニアで杉原氏のビザを受け取り、旧ソ連のウラジオストクを経て福井県の敦賀港に上陸し、41年春に神戸市に到着した。同市には半年余り滞在し、中国・上海へ旅立った。ウェイランドさんは戦後、オーストラリアに渡り、今も暮らしている。

神戸市での思い出は、同市の百貨店「大丸」で焼きそばを食べたことだという。当時の大丸の写真を見せると、「とっっても好きだった」と笑顔で話した。熱い銭湯の湯を浴びたり、宝塚で歌劇を見たり、「幸せだった」と振り

返った。

神戸市などによると、当時は「神戸ユダヤ共同体」と呼ばれるユダヤ人組織が避難民の受け入れを担い、食料や衣服などを援助していた。住居はホテルや空き家が使われ、地元住民との交流もあったという。この共同体の建物は、大戦末期の米軍の空襲で失われたが、学校法人「コンピュータ総合学園」(同市)の敷地内に石垣だけが残っている。ウェイランドさんは手で石垣に触れ、「心が動かされる」とつぶやいた。

少年時代まで過ごした欧州では現在、ロシアによるウクライナ侵攻が続いている。「多くの難民が生まれ、苦しんでいることに胸を痛めている」。かつての自分に重ね合わせ、悲しそうな表情で話した。

ニュースワード

「命のビザ」 第2次世界大戦中の1940年、リトアニア・カウ

ナスで日本領事代理を務めていた杉原千畝氏(1900〜86年)が、ナチス・ドイツの迫害を逃れるユダヤ人難民らに対し発給した日本を通過するためのビザ。その数は2000通以上で、ホロコースト(ユダヤ人大虐殺)の犠牲性になる可能性があった数千人の命を救ったとされる。このビザの発給を受けて欧州を脱出したユダヤ人は神戸市や横浜市などに一時滞在。その後、米大陸やオーストラリアなどに渡った。